

める Vol.9 (2015.12)

著者	NPO法人滋賀医療人育成協力機構
発行年	2015-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10422/11122

め で る



「夏の宿泊研修・興聖寺（高島市）にて」

スポットライト

高島市における地域医療の現状と取り組みについて

高島市健康福祉部 健康推進課長 清水 勝徳

特集

夏の宿泊研修 in 湖西 2015

「人」

『暮らし 支え合い 助け合い』

NPO法人元気な仲間 代表理事 谷 仙一郎

病院紹介

滋賀医科大学医学部附属病院

看護学生向け情報

これからの地域包括ケアの時代を支える 訪問看護ステーション

Contents

奨学金情報

医学生・看護学生のみなさんへ

「滋賀県内の医療系学生向け奨学金制度」

地域自慢

琵琶湖の北西、四季折々の
高島市

報告

開催報告／参加報告

ご入会・ご寄附のご案内／編集後記

高島市における 地域医療の現状と 取り組みについて



高島市健康福祉部 健康推進課長
清水 勝徳



高島市は、琵琶湖の西部に位置し、平成17年1月1日にマキノ町、今津町、朽木村、安曇川町、高島町、新旭町の5町1村が合併して、新しく高島市として歩み始めました。

古来より、当地域は京都・奈良の都と北陸を結ぶ交通の要衝として栄え、中でも陸上交通は比叡・比良山麓を湖畔に沿って走る西近江路や、塩漬けされた鯖を運搬する街道であったことから「鯖街道」と呼ばれる若狭街道が主となり、これらの街道と大津方面への湖上交通の拠点である港町や宿場町として栄えてきました。

気候的には、日本海側に近いことから冬季の寒さは厳しく、積雪量の多い日本海側気候となっています。また、秋季には「高島しぐれ」と呼ばれる降雨がしばしばあります。

また、近江聖人と称えられた日本陽明学の始祖、中江藤樹先生生誕の地として知られているとともに、数多くの高島商人（近江商人）を送り出した土地柄でもあります。

総面積は約693km²（うち琵琶湖の面積181.64km²）で、9月末の人口は51,217人、高齢化率は31.2%となっています。

なお、25年後の2040年には40.6%まで高齢化率が上昇すると国立社会保障・人口問題研究所（2013年3月推計）が公表しており、医療介護需要予測でも2010年を100とした場合、2040年には介護需要量が150と予測されており、益々介護に要する需要が増大すると予測されています。

また、少子化については、平成25年までの10年間の特殊出生率の平均は1.43で、年間出生数も300人を切ろうとする状況にあります。

このような少子高齢化する高島市の地域医療としては、主に急性期医療の対応を行う高島市民病院と療養期・回復期医療の対応を行うマキノ病院・今津病院の3つの病院とともに、在宅医療の推進を図る34ヶ所の一般診療所があり、地域において良質な医療を提供するとともに、多様化・高度化する医療需要に的確に対応するため、各医療機関の役割・機能分担による緊密な連携協力体制の構築を進め医療資源を効率的に活用することで、地域医療の充実を図り、地域内での医療の完結を目指しています。

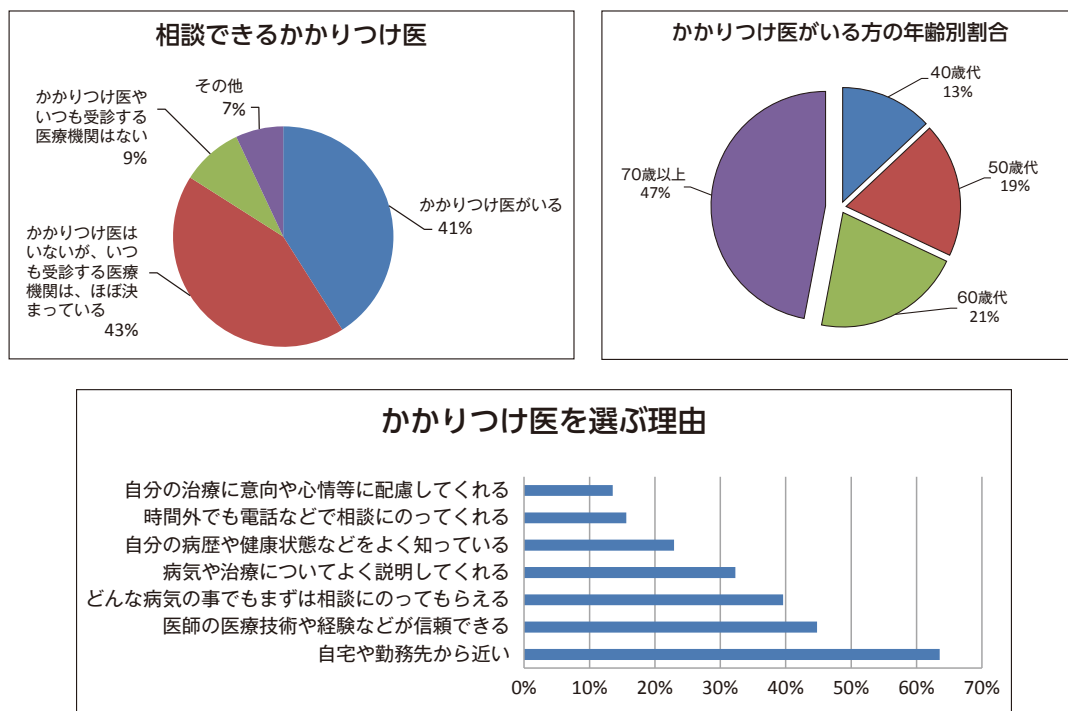


▲冬のメタセコイヤ並木（高島市マキノ町）

そのため、平成23年に高島市医師会を中心として、高島市医療連携ネットワーク運営協議会が設立されました。

定期的な会議をきっかけに顔の見える関係づくりが促進されており、個々の機関が持つ能力を最大限に活用し、市内の医療提供能力を質的・量的に向上させる取り組みが積極的に行われています。

特に、高島市民病院は市内で唯一の公立病院であり、地域において中核的な役割を担うべき病院であり、施設の改築とともに新たに健診棟を新設して、平成25年4月にグランドオープンしました。地域医療の拠点として益々果たすべき役割が大きなものとなっており、災害などの重大な危機が発生した場合の災害拠点病院として、その機能を十分発揮できる体制整備に取り組んでいるところです。



ここで地域医療の実態として、市の調査結果から、かかりつけ医がいる、あるいはいつも受診する医療機関はほぼ決まっているという方の割合は80%をこえており、特にかかりつけ医がいる方の半数は70歳以上の高齢者となっています。

また、かかりつけ医を選ぶ理由としては①自宅や通勤先から近い、②医師の医療技術や経験などが信頼できる、③どんな病気の事でもまずは相談にのってもらえるという結果となっており、高齢者の身近な場所、何でも相談にのってもらえる医師が望まれているようです。

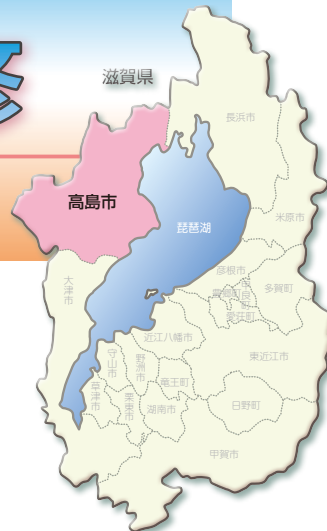
今後も医療や介護に必要とされる人材の不足や移動に係る時間的ロス等、様々な課題に対しても、病院と病院の連携、病院と診療所の連携を強力に進めていくことで、地域と一体となって地域医療の充実を図ってまいります。

また、住み慣れた地域で安心して自分らしく人生の最後まで暮らしていくためには、医療だけでなく介護・予防・生活支援などが一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築が重要とされています。

なお、高島市医療連携ネットワーク運営協議会には、医師だけでなく歯科医師やケアマネージャー、薬剤師、保健師、訪問看護や介護施設の職員なども参画しており、地域医療だけでなく、様々な資源を有効に活用し、地域の自主性や主体性を基に地域の特性を生かした高島市独自の地域包括ケアシステムの構築に取り組んでおり、関係者と連携して更なるケアシステムの充実を目指してまいります。

夏の宿泊研修

in 湖西 2015



8月24日(月)～25日(火)の2日間、滋賀県で学ぶ医学生・看護学生や滋賀県出身の医学生・看護学生を対象とした地域・医療理解のための宿泊研修を実施しました。研修には、滋賀医科大学の医学生と看護学生、自治医科大学の医学生の16名が参加されました。

1日目◆ NPO法人が運営する小規模多機能型居宅介護施設と地域の中核病院を訪問しました

NPO法人元気な仲間（説明・見学）

平成27年4月に開設された小規模多機能型居宅介護施設を見学させていただき、その後、法人設立の経緯や地域での取り組みについてお話を伺いました。



藤樹書院跡（説明・見学）

中江藤樹の住居跡・講堂跡である藤樹書院を訪問し、江戸の儒学者 中江藤樹の生涯や教えについての説明を聞きました。



高島市民病院（説明・見学）

高山病院長から湖西地域における高島市民病院の概要と役割や今後の展望についてお話をいただき、その後、院内救急施設、ヘリポートや病棟、また地下にある免震設備などを見学させていただきました。



今津サンブリッジホテル（交流会）

第1部 高島市健康福祉部健康推進課長 清水勝徳氏から「高島市の概要と地域医療について」、朽木診療所長 倉田佳彦氏から「地域で学ぶ地域医療～朽木診療所に赴任して～」と題してご講演いただきました。

第2部 訪問先関係者の方々や里親の方々との情報交換や交流の場となりました。



2日目◆ 朽木地区の見学と朽木唯一の医療機関である診療所を見学しました

朽木溪流魚センター（見学）・興聖寺（説明・見学）

朽木の中心地から30分ほどバスで向ったところにある朽木溪流魚センターを見学しました。その後、朽木氏の菩提寺である興聖寺を訪問し、住職からお寺の歴史についてのお話を伺いました。



高島市国民健康保険朽木診療所（説明・見学）

倉田所長の案内で、診療所での実際の活動について説明をききながら施設見学をさせていただきました。



訪問先の皆様からのメッセージ

宿泊研修を受け入れて

高島市民病院 院長 高山 博史



8月24日に滋賀医大里親研修で多くの学生さんに見学に来ていただきました。多くは1回生から3回生の学生さんたちでしたが、中にお一人自治医大6回生の学生さんもおられ、高島地域への関心の高さを感じました。幸い天気にも恵まれ、高島市民病院が琵琶湖北部に面した風光明媚な場所に位置しているのがよくわかっていただけたのではないかと思います。それでいて近江高島駅前に位置し京都、大阪にも30分から1時間ほどで行くことができ、滋賀県下の病院のなかでも利便性が高いということも意外に思われたかもしれません。

私の方では病院の大会議室で病院紹介、高島地域での医療、これからの少子高齢化を迎える医療環境などについてお話をさせていただきました。高島市の人口は5万1千人余りですが、この人口規模で2次医療圏を形成しています。2次医療圏の規模では全国でも後ろから数えた方が早いくらいです。当然、医療圏を支えるにはそれに相応しい地域の中核病院が必要であり、当院が唯一その役割を果たしています。医療を通してその地域を保全するという重大な責務を負っている病院です。皆さん方にとってこれからの少子高齢化が進む地域医療を理解していただくには、最も適した病院を訪問していただいたのではないかと思います。まだ入学されてからの期間が浅い学生さんたちが高島地域の医療にどのように関心を持っていただけるかまではわかりませんでしたが、私の説明を熱心に聞いていただき有難うございました。

交流会においては、近江今津にある今津サンブリッジホテルに場所を変え、朽木診療所の常勤医師である倉田医師の講演も聞いていただきました。倉田医師は自治医大卒で今年の4月から朽木診療所に勤務され、ご家族と共に朽木に住まれ外来診療・在宅医療など朽木地域の僻地医療に献身されておられます。お若く誠実な臨床医の志を感じていただけたのではないかと思います。

皆さん方が医師としてこれから歩んでいかれる医療事情は、私

どもが経験してきたそれと格段の相違があるのは間違いのないと思います。それだけに私どもの経験の伝授が役にたたないほどの時代を担っていくことになるでしょう。皆さん方自身の心と体で医療をしっかり受け止めて、志高く歩まれることを願っております。



▲素晴らしいロケーションでの記念写真



▲地下にある免電設備
見学の様子



▲ヘリポートは駐車場横、
後方は乙女ヶ池とびわ湖



▲高山先生のご講演

■ 宿泊研修に参加して

高島市国民健康保険朽木診療所 所長 倉田 佳彦



私は平成27年4月より朽木で診療させていただいております。経験はまだまだ少ないにも関わらず、今回の宿泊研修において発表の機会をいただき、ありがとうございます。参加された医学生・看護学生の皆様、お疲れ様でした。

初日の講演会では、「地域を知る」ことを通して、その地域の診療にあたる大切さについてお話しさせていただきました。地域の診療所の役割は医療を提供するだけでなく、介護や暮らしの課題に取り組むことによって、その地域での生活を支える（時には寄り添う）ことが必要であると考えています。地域で生活される方々がどのような生活背景を抱えているかを知ることは大変重要ですが、時に困難を伴い、また地域医療の面白さの一つでもあります。

朽木は人口2000人、高齢化率40%の地域です。県内のその他の地域と同様、高齢化、人口減少、過疎が深刻な問題となっています。また山間地域であり、琵琶湖の面積のおよそ4分の1と面積が広く、診療所から片道30分以上、直近の総合病院へは車で片道1時間程度かかる地域が存在します。このような地域でも最期まで朽木で過ごしたいという方や家族と一緒に都会で生活するより住み慣れた朽木での生活を選択される方もおられます。地域での生活を支えるため市の保健師や民生委員、ケアマネージャ、社会福祉協議会、訪問看護師、訪問介護士、その他たくさんの職種の方が積極的に関わり支援されており、定期的に行われる地域ケア会議などを通して他職種連携に努めています。

研修2日目には実際に朽木まで足を運んでいただき、地域の視察や診療所の見学をしていただきました。過疎や高齢化が進む山間地域での医療がどのようにおこなわれているか、また田舎ならではの地域の魅力を肌で感じていただけたのではないのでしょうか。



▲廊下はすべて板貼りで温かさを感じます



▲木のほりの太いこと!!

今回研修に参加された多くの学生が滋賀の地域医療に興味をもち、積極的に参加されており、大変頼もしく感じました。また県外出身の学生さんが、多く参加されていることにも驚きました。私自身、今回の経験を通して自分の診療を振り返ることができ、朽木地域の再発見にもなりました。今回の研修で得られた経験や感じたことを将来、皆様のそれぞれの活躍の場において少しでも参考になれば幸いです。



▲診察室の風景

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科1年生 小島 崇

今回初めて参加しました。個人で行く病院見学では訪問先を医療という視点からのみ見学しがちですが、宿泊研修では歴史や文化の面からも地域を知ることができる点がありがたかったです。朽木という姓が、鹿児島島の島津家と並んで鎌倉時代から絶えることなく続きただ二つの姓であることなどを聞くなかで、その地域の人々が誇りに思っていることを理解することも地域医療を考えるうえで重要であるように思いました。

滋賀医科大学 医学科2年生 木内 亮平

今回訪れた湖西地域は、都市部と比べて不便な地域であるという印象であったが、自然豊かで風光明媚な地であった。そして、滋賀県でも高齢者の割合が高い地域の一つであるが、古くからある人と人とのつながりを活かして、地域で助け合う取り組みを実践しておられた。また、高島市民病院・朽木診療所の訪問で、地域を支えるという使命を持って、地域医療の最前線で医療に取り組んでおられる方々の話を聴くことができた。その中でも「地域の崩壊が先か、はたまた医療の崩壊が先か。医療が崩壊すると地域が崩壊する。医療が先に崩壊してはならない。」という言葉が印象的であった。これはいわゆる農村部だけの問題ではなく、都市部にも当てはまることだと感じた。目の前の患者さんに真剣に向き合うだけでなく、地域を支えるという視点を忘れずにいたいと思う。

滋賀医科大学 医学科2年生 坂井 有里枝

今回が2回目の参加でした。今回は高島市の医療を学び、見学するということでしたが、私自身生まれは関東、今の居住地も京都であるため、高島市のことは全く知らない状態で参加させていただきました。

「NPO法人元気な仲間」の代表の方のお話では、今後ますます進むであろう超高齢社会についての注意喚起が耳に残りました。高齢社会というのは決して地域特有のことではなく、むしろ都市部でこそ今後急速に進むことが予測されるので、それに対し我々は十分に備えなければならないということに身の引き締まる思いでした。

この研修で残念なのは、滋賀県出身の参加者が半数以下であることです。より滋賀の実情を身を持って体験している学生と今回見聞きしたことについてもっともっと語り合うことができたならよかったのと思っています。

自治医科大学 医学科6年生 八坂 寛之

参加させていただくのは7回目、湖西地域の研修は2回目になります。私はこの湖西地域、高島市の出身です。「NPO法人元気な仲間」さんは、単に高齢者の介護ニーズに応えるだけではなく、日常的にふれあいや支え合いのある「地域づくり」に力を入れておられるという印象でした。代表の谷さんのお話からは、高島のソーシャルキャピタルの豊かさが感じられ、地域のよさを最大限に活かしたサービスを展開されていると感じました。高島市民病院では病院長の高山先生にお話いただき、「断らない救急」「専門医待機機制」「メディカルネットによる病診連携」などといった現在の取り組み、そして総合診療や在宅医療の導入を含む今後の展望についても聞かせていただきました。高島市の医療を支えるという確固たる使命感が伝わってきて、医学生である前に一高島市民として非常に心強く感じました。朽木診療所の倉田先生には、朽木という地域の魅力、病院と診療所の違い、地域医療の楽しさなどを学生にもわかりやすく教えていただきました。田舎ならではの、診療所ならではのご苦労や悩みや戸惑いも率直にお話し下さった上で、それでも地域医療は楽しいと締めくくって下さったことに、自治医大の後輩としてとても勇気づけられました。

来年からは滋賀医科大学で初期研修をさせていただく予定です。7度の宿泊研修で滋賀のことがもっと好きになりましたし、この研修で出会った多くの人たちと一緒に、自分も地域医療に熱意をもって取り組みたいと思うようになりました。これからしっかり研鑽を積んでいつか恩返しできればと思います。

ありがとうございました。

滋賀医科大学 医学科1年生 後藤 幸

私は今回はじめて参加させていただきました。はじめてにうかがった「元気な仲間」では地域の中での支えあえるあたたかさのようなものを感じました。ただ、いろいろな事情でサロンなどに参加できない人もいるということで、「孤立」を防ぐことの難しさを感じました。朽木診療所の倉田先生のお話からは、幅広い技術と知識を身につけることがいかに大切か、が伝わってきました。また、山の中の道路が細くて、雪の季節は往診も大変なのかな、と思いました。

高島は自然が美しいだけではなく、人と人とのつながりが深いと先生方がおっしゃっていたのがとても印象的でした。2日間が高島が好きになりました。このような機会を与えていただきありがとうございました。

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科1年生 山本 美葉

高島市の医療と聞いて私はまず、産婦人科医が不足しているという問題を思い浮かべました。しかし今回の訪問で、高島市民病院の充実した設備や、病院長先生の高島市の医療全体に懸ける思い、地元の方が起ちあがって高齢化問題に前向きに取り組んでおられる姿を目の当たりにし、私のイメージは良い意味で覆されました。また、交流会の参加者の方がおっしゃった「夕方になったら隣の家の洗濯物も取り込んでおいてくれる」という言葉。高島の魅力を表す印象的な言葉でした。高島市の医療や福祉を支えているのは、そこに住む人々の互いを思いやる優しさで、地域を愛する気持ちだと思いました。

滋賀医科大学 医学科3年生 牧野 愛

安曇川、朽木。書けるが読めない。栗東、和邇が読めるようになって誇らしい気持ちだったけれど私の滋賀力はまだまだだなあと痛感。あどがわ、くつき。自分でも口に出してみても他の人が言っているのを耳で聞いてようやく体得。朽木はくちき、という読みがくつきに訛って変わったのだとお寺の住職さんが教えてくれた。安曇川はアドベリーなる果物を食し味覚で覚えた。本研修にて滋賀の様々な地名を覚えていきたいと決意した次第。ありがとうございました。

滋賀医科大学 医学科2年生 加藤 美和

今回は初めて参加しました。明確な動機は無く、友達に誘われたのでなんとなく参加したのですが、とても内容の濃い充実した2日間で、滋賀の今まで知らなかった新たな魅力や、今回訪れた高島市の医療の現状を知ることができる研修でした。特に印象に残ったのは研修で初めに訪問したNPO法人「元氣な仲間」というデイ・サービス施設と、その施設をつくられたこんにゃく屋さんの男性の話です。高齢社会の日本の中でも高齢化率31.7%と、特に高い割合である高島市で、地域社会において日常的にふれあいや支えあいのあるまちを目指して、「元氣な仲間」の他にも生活の中の困りごとを会員同士で助け合う「たすけあい高島」など他にも精力的に活動を行われ、一つ一つの施設の規模は小さくとも、地域の高齢者の方々に温かく支えておられることに心を打たれました。他にも朽木診療所で地域の医療をひとりで支えておられる先生のお話も聞くことができ、高島市の医療を支える方々の温かさを知ることができました。また将来私もこのような温かい医療活動に携われるようになりたいと、大学に入って2年目で中だるみしていた気持ちが、きゅっとひきしまるように感じました。



▲学生交流会

滋賀医科大学 看護学科4年生 藤野 美喜子

「滋賀県の医療」と言えば、高島市が必ず挙げられていたので、以前より興味を持っていました。

高島市民病院は「断らない救急」を掲げ、地域の中核病院としての役割を果たすべく取り組まれておられ、朽木診療所はかかりつけ医として幅広い疾患に対応されていると同時に、ネットを駆使し、他の病院と連携を取られており、熱心に地域の医療を支えておられる様子がうかがえました。

特に印象に残ったのは、NPO法人「元氣な仲間」さんです。住民を巻き込み全世代に向けた地域づくりに積極的に取り組んでおられました。他地域のモデルケースにできるのではないかと思います。病院・診療所見学だけでなく住民同士の距離が近い高島市ならではの地域づくりも見せていただき、非常に勉強になりました。

このような機会を作ってくださったことに感謝します。

滋賀医科大学 医学科3年生 河原 早苗

私の地元が湖西で、幼い頃はよく遊びに訪れていたこともあり、今回の研修はいつもより親しみ深いものでした。再び訪れてみると、改めて豊かな自然や落ち着いた時間の流れを感じました。

研修を通して、過疎化や天候による災害、医療や介護の問題が深刻であることが最も印象に残りました。しかし、それを人と人とのつながり、絆で助け合って乗り越えておられるのだと知りました。医師と患者の関係は地域のつながりだけでなく心の距離もとても近く、地域医療の良いところや難しいところを間近に学べました。十分な機材や人材がない中でも、あらゆることをこなす豊富な知識、確かな技量、そして何より強い心意気が地域医療を行う医師にとって大切であるのではないかと感じました。地域医療に関心のある私にとって、とても学び深い研修となりました。

今回の研修を機会に、また高島方面に訪れ、たくさんの方にその良さを知ってもらいたいです。



▲興聖寺 足利庭園にて



◀朽木溪流魚センターにて

宿泊研修に参加して(学生の声)

滋賀医科大学 医学科3年生 北川 奈津子

今回の宿泊研修で私は初めて高島市を訪問させていただきました。訪問させていただいて高島市の高齢化率が高く課題を抱えていることを知りました。高島市には病院も少なく今後ベッド数が足りなくなるだろうとおっしゃっていて、その問題は高島市だけでなく今後高齢社会の進んでいく日本全体に当てはまる問題なのだろうと感じました。高島市の職員の方は施設が足りないからといって作っていたら介護保険が足りなくなってしまうから在宅で頑張るというようなこともおっしゃっていました。この話を聞き、足りないものは作ればいいという考えがいかに安易な考えであるかに気づきました。そして、在宅医療の必要性を以前にも増して感じました。

滋賀医科大学 医学科3年生 力武 里菜

私は滋賀県出身ですが湖西地域はなかなか行く機会がなかったので今回の研修は大変貴重な経験となりました。

今回は、高島市民病院、朽木診療所、NPO法人元気な仲間での研修を通して、地域が必要としている医療を提供することの大切さを学ぶことができました。湖西地域は地域の繋がりが非常に強く、住民同士は勿論のこと、医師と患者間の信頼も厚い所だと感じました。地域医療は信頼があつてこそ成り立つものであると改めて考えさせられました。

毎回、宿泊研修では地域医療に対する熱意など多くのことを吸収できるのでこれからも参加していきたいと思います。

滋賀医科大学 医学科1年生 松藤 忠和

この研修で一番印象に残ったのは、高島市民病院の高山先生のお話でした。かつての深刻な医師不足の状況から、それを全く感じさせないまでに立て直した、熱意と力を感じさせるものでした。病院のいろいろな施設を見学させていただいたことも、初めての体験でとても新鮮でした。私は観光を目的にこの宿泊研修に参加しようと決めた部分もあったのですが、多くの方の地域医療にかけける情熱や、将来的に地域医療を担ってほしいという期待を直に感じる事ができて、非常に良い経験となりました。実際に医師として医療を担いはじめるまで、先は長いですが、これからも継続して努力していきたいと思っています。ありがとうございました。

滋賀医科大学 医学科3年生 藤井 麻梨子

今回の夏の宿泊研修は高島市を中心とした琵琶湖の北西部を巡りました。私は湖東出身であり、湖西方面をほとんど訪れたことがなかったので、見聞したものが全てが新鮮で滋賀県民であっても知らないことが多くあると実感しました。特に高島市は湖東とはまた違った文化や歴史が豊かな場所でした。

初めて訪れた高島市民病院は、高島市の医療の中枢と言え、医師不足や救急の受け入れにしっかり対策が練られていました。その体制は地域の拠点病院としてモデルになると思います。

また、滋賀県内の医師がネットを通して、様々な情報を交換、共有できるシステムがあることを初めて知りました。私は、このシステムのおかげで、滋賀県全体の医療スタッフに安心感がもたらされ、良い一体感が生まれると思います。

こうして、ある地域で行われている医療と、県全体の医療のシステムが同時に学べたよい研修でした。

滋賀医科大学 医学科2年生 市原 豪

今回、宿泊研修で湖西地域(高島市)を訪れました。特に印象に残ったのは、NPO法人元気な仲間(小規模多機能居宅介護施設)さんを見学した際に伺った「うちはずっとと蒔蒔屋で、『ああ、あの蒔蒔屋さんのやってはるところなら』って言うて来てくれる人がいはる。こういうすでにお年寄りの多い地域は元々ある繋がりが介護の現場にも活かされている。」という発言でした。すでに高齢化の進行した湖西地域に対して、今後高齢化の急激な進展が見こまれる大津などの都市部では地域間の既存の繋がりを頼りに医療・介護事業を構築することは難しいだろうと想像したからです。このように現場で働いていらっしゃる様々な人々から直接お話を聞く機会をいただく、有意義な研修を設定していただいた関係者の皆様に感謝します。ありがとうございました。



▲藤樹書院跡にて

Interview

『暮らし 支え合い 助け合い』

NPO法人元気な仲間 代表理事 谷 仙一郎



「毎度おおきに、こんにゃく屋です。」

それまでの私は、特に介護について考えていたわけではなく身近にも考えていませんでした。知り合いに誘われて、たまたまヘルパー養成研修を受講したのをきっかけに、こんにゃく屋が地域でのささえあいについて考えるようになり、平成15年、NPO法人元気な仲間を設立しました。現代の日本は、今までどの国も経験したことのない超少子高齢・人口減少社会をつき進んでいます。日本の高齢化率は、26%を越えました。社会全体が変わり景気も低迷し、行政にお金がないこの世の中では、行政や制度にすべてを頼ることは不可能です。かつて、様々な生活課題に対して、家族や地域による支え合いにより解決したりしましたが、核家族化や地域社会の変化などにより、地域での支え合いは薄れてきています。今の時代にあった地域の支え合いのあり方、お互いさまの関係がある、そんなあたたかい地域社会づくりが目標です。



▲地域での支え合いを考えはじめた頃
「知事と気軽にトーク」にて

「さりげなく支え合える家庭的な暖かい場所」

介護が必要になっても、自分の居場所があることは重要です。まず取り組んだ事業としては、民家を利用した家庭的なデイサービスと、地域の住民の集える場「あったかほ一む」を開始しました。高齢になったり障がいを持って介護が必要になっても、本当は自分の事は自分でしたいと考えるものです。家庭的ななじみのあるあたたかい場所で、さりげない介護でゆったり、ほのぼのとすごせて、役割があって感謝



▲おじいちゃんおばあちゃんと子どもたちの
ふれあいから様々な事を学ぶことも

され、自分の居場所と
感じられる場所になる
ようにと取り組んでいます。



▲「あったかほ一む」「デイサービスより愛」
昔ながらの民家を利用し、家庭的なあたたかさあふれる
寄り合い（より愛）作りを目指す

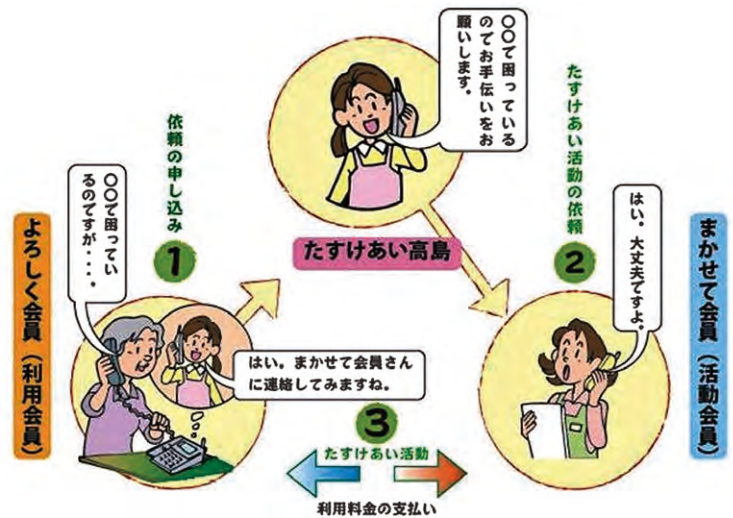
「助けられたり助けたり、支え合い」

自分だけでは生活しづらくなっても、住みなれた自宅で生活するということは、人の支えが必要です。地域の住民同士の支え合いの仕組みとして『たすけあい高島』という有償ボランティアの仕組みをはじめました。障がいがあっても、高齢になっても、その人らしく生活出来るようなまちとなるように、私たち地域住民は、行政に頼るだけでな

く、地域の住民同士で支え合う互助の考え方をもとに、世代間を越えた地域のつながりや顔の見える関係をすすめ、ふれあいや支え合いのある地域を、みんなで作っていかれたと考えています。ふだんは気づきにくい、あるいは薄れてしまったかのように見える地域の力の発見があり、何よりも参加している人びとのいきがいや役割、ハリのある生活にもつながっています。会員さんの声として、「家族の協力もあり充実した活動が出来ています。」「よろしく会員さんにお礼を言われると、うれしくまたお手伝いをしたいと思えます。」また助けてもらった会員も「この仕組みがなければ仕事で高島に引っ越して来ることが出来なかったのでうれしいです。」「ヘルパーさんにはしてもらえない事を、していただけるのでありがたいです。」など聞かせていただきますと、地域の支えあう力だなと感じさせられます。

また、住民が参加して、支え合いや助け合いの活動をしている多様な組織・団体が連携をとることができるようにするため、住民参加型助け合いサービス連絡会をはじめました。自分たちの団体で対応できなくても、他のそれを得意とする団体につなげ、どこに相談が入ってもなんとかできるようになればと考えています。連携することで、顔の見える関係になり、互いに相談できる横のつながりもできました。

＜「たすけあい高島」有償ボランティアの仕組み＞



『住み慣れた地域で暮らしていけるように』

その他にも、移送サービス、ケアマネージャーやヘルパーの事業、働く女性の家の管理運営、学童保育所の運営、男女の出会いから結婚・妊娠・出産・子育てまでの一貫した支援のための事業など、元気な仲間の事業が増えていき、今年の春からは、私の地元で、住み慣れた自宅や地域において在宅生活を継続するために、家族的な環境と地域住民との交流の下で、「通い」「訪問」「泊まり」を組み合わせ、一人一人の利用者にとって必要なサービスを一つの拠点から一体的に連続的に提供する小規模多機能型居宅介護の事業を開始しました。利用者がその有する能力に応じその居宅において自立した日常生活を営むことができるようにお手伝いしています。

『将来医療に携わるみなさんへ』

私自身、こんにゃく屋から福祉の世界に入りましたが、医療や介護は人と接することが仕事で、利用者さんの笑顔が見られたり、喜びが感じられ、やりがいを感じることができます。大変でもありますが、とてもやりがいのある仕事ではないかと思えます。みなさんが、様々な勉強を重ねられ、卒業後は医療・介護の現場で活躍されることを楽しみにしています。

プロフィール

谷 仙一郎／高島市新旭町在住

昭和10年創業のこんにゃく屋「谷仙商店」の三代目

商工会主催ヘルパー養成研修受講をきっかけに、

平成15年 NPO法人「元気な仲間」を設立

平成24年 公益財団法人「さわやか福祉財団」

さわやかインストラクター委嘱

平成27年 「小規模多機能型居宅介護施設 元気な仲間」を設立



▲堀田力氏と(公益財団法人さわやか福祉財団)会長・弁護士)



▲多様な団体と連携し、お互いに相談できる関係に

滋賀医科大学医学部附属病院

病院の概要

本院は、大津市東部の琵琶湖と比叡山を臨む丘陵に立地し、昭和53年に大学病院として開院しました。この丘陵地には、滋賀医大とともに、龍谷大学、立命館大学も隣接し、滋賀県の文化ゾーンを形成しています。開院から40年近く、滋賀県の医学教育、医師教育の中心施設として、多くの医療人を輩出して参りました。平成7年には、特定機能病院として承認され、滋賀県を中心に高度な医療を実践、提供し、「信頼と満足を追求する全人的医療」をモットーに地域に密着した大学病院を目指しています。

所在地：大津市瀬田月輪町 開設者：国立大学法人滋賀医科大学

開設年月日：昭和53年4月1日 病院長：松末 吉隆 病床数：612床

診療科目：内科（循環器、呼吸器、消化器、血液、糖尿病内分泌、腎臓、神経、腫瘍）、小児科、精神科、皮膚科、外科（消化器、乳腺・一般、心臓血管、呼吸器）、整形外科、脳神経外科、耳鼻咽喉科、母子診療科、女性診療科、泌尿器科、眼科、麻酔科、ペインクリニック科、放射線科、歯科口腔外科、リハビリテーション科、臨床遺伝相談科、救急・集中治療部、総合診療部・初期診療科

医師数：367人

指導医数：118人

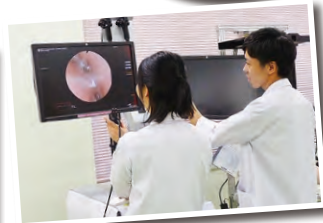
一日平均外来患者数：1313.1人

一日平均入院患者数：520.3人

ドクターヘリ



最新の手術室



スキルズラボでのシミュレーション研修

研修責任者からのメッセージ

医師臨床教育センター長 西田 保裕



大学病院として、卒後研修に関する以下の特徴を非常に高いレベルで維持し、さらに充実を目指しています。

1. 医学教育でのエキスパート医師が多数いる

本院には、100名以上の教育経験豊かな指導医*を擁し、各診療科の代表医師による毎月の研修運営会議を開催し、研修の密接な連携を構築しています。

*ここで言う指導医とは、卒後7年目以上で、厚労省が認定した講習会修了医師を指す。

2. 多数のエキスパート医師が診療を網羅している

網羅した診療を、県内最多のエキスパート医師から修得できます。このため、各診療科内で網羅した疾患を、正しい理論に基づき、効率良く経験できます。

3. 一般病院での診療も実践できる

本院では医療の最前線である協力型病院での学外研修をする機会を積極的に提供しています。特に、Aプログラムでは、滋賀医大の第二病院としての東近江総合医療センターで、1.5ヵ月間、地域医療の最前線を経験でき、プライマリケアに関する診療能力が高まります。

4. 研修設備と研修機会が充実している

院内には多数のカンファレンスルームや、広いスキルズラボ、多数のシミュレーターと、研修設備が充実しており、セミナーが計画的に開催されています。フレックス研修や保育所の利用も可能で、本人の家庭環境に配慮した研修を提供します。また、育児中の2名の女性医師が副センター長として在籍し、家庭を持つ女性医師のキャリアサポートも積極的に行っています。

5. 幅広い世代の医師、多くの同僚と仕事ができる

大学病院は研修医からベテラン医師まで、幅広い世代で構成され、皆さんの将来の医師像がはっきり見える研修環境で、我々指導医は誠実に指導いたします。また、滋賀医大では卒業校を問わない平等な研修を提供し、世代を超えた自由な気風にあふれているのが特色です。他大学出身者でも、多くの同僚の中ですぐに仲間意識が芽生えます。そして、この多くの仲間とその関係は、将来の医師としての大きな宝、財産になります。

皆さん！ 滋賀医大の懐深い研修体制で、真摯で信頼される医師を目指しませんか？

滋賀医大での初期臨床研修プログラム

平成28年度開始プログラム ①Aプログラム（標準型総合研修コース）【募集数40人】

1年目：滋賀医科大学医学部附属病院

内 科 (24週)	E R (救急・ICU) (6週)	選択必修 (12週)			自由選択科 (6週)
		消化器・ 乳腺一般 外科 (4週)	心臓血管 ・呼吸器 外科 (4週)	麻、精、 小、産から 1科選択 (4週)	

2年目：滋賀医科大学医学部附属病院

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域医療 (1ヵ月)	E R (救急・ICU) (1.5ヵ月)	総合内科・外科 (1.5ヵ月) 東近江総合医療 センター		自由選択科 (8ヵ月)							

②Bプログラム（周産母子研修コース）【募集数4人】

1年目：滋賀医科大学医学部附属病院

内 科 (24週)	E R (救急・ICU) (6週)	選択必修 (12週)	自由選択科 (6週)
		* 次の組合せから選択する。 小児科 (8週) + 産婦人科 (4週) 産婦人科 (8週) + 小児科 (4週)	

2年目：滋賀医科大学医学部附属病院

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域医療 (1ヵ月)	E R (救急・ICU) (1.5ヵ月)	自由選択科 (9.5ヵ月) (産婦人科希望者は麻酔科を2ヵ月以上選択することとする。)									

③Cプログラム（1年目協力型病院研修コース）【募集数10人】

1年目：協力型病院

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
内 科 (6ヵ月)						E R (救急・ICU) (1.5ヵ月)	選択必修 (3ヵ月)			自由選択科 (1.5ヵ月)	
							外 科 (1ヵ月)	麻、精、小、産から 1～2科選択 (1ヵ月もしくは2ヵ月)			

2年目：滋賀医科大学医学部附属病院

地域医療 (1ヵ月)	E R (救急・ICU) (1.5ヵ月)	自由選択科 (9.5ヵ月)									
---------------	----------------------------	---------------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

協力型病院： 長浜赤十字病院、市立長浜病院、彦根市立病院、近江八幡市立総合医療センター、東近江総合医療センター（旧 国立病院機構滋賀病院）、公立甲賀病院、京都医療センター、地域医療機能推進機構滋賀病院（旧 社会保険滋賀病院）、野洲病院、日野記念病院、湖東記念病院、大津市民病院、守山市民病院、済生会滋賀県病院、草津総合病院、鹿児島市立病院、水口病院、滋賀里病院、琵琶湖病院、セフィロト病院、豊郷病院、南草津野村病院、伊賀市立上野総合市民病院、武田総合病院、宇治徳洲会病院（来年度予定）

協力型施設： 弓削メディカルクリニック、東近江市永源寺診療所、きびきクリニック、その他草津・栗東地域を中心に39カ所の診療所等

滋賀医大前期研修医数： 平成25年度：35名、平成26年度：39名、平成27年度：39名、平成28年度：48名（内定者）

研修医からのメッセージ

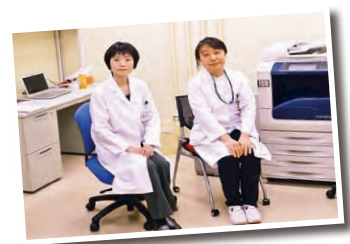
2年目研修医 池川 貴子

滋賀医科大学医学部附属病院での研修が始まり、1年半が経過しました。まだまだ分からないことが多いのですが、充実した毎日を送っています。

どの診療科でも大学病院は「最後の砦」となることが多く、非常に稀な疾患や、ひとりで多くのプロブレムを抱える患者さんもたくさんいらっしゃいます。自分の引き出しを多く持つことで、これからの医者としての数十年の糧となることは間違いありません。指導医の先生方も多く、カンファレンスではさまざまな意見が飛び交います。多くの視点で考えられ、最先端の治療を取り入れられるのは大学病院ならではの魅力だと思います。

同期が多いことも魅力の一つです。現在1年目39人、2年目39人が大学で研修しています。必修の内科では5、6人の同期とともに研修します。心の中で少しライバルに思いつつ、何でも相談できる同期がすぐそばにいるのは本当に頼もしいです。また、大学病院で研修した研修医は、大学に入局することが多く、初期研修を終えた後も各診療科に気軽にコンサルトできるのは安心です。

大学病院は教育病院であり、無理なく確実に学べる環境に恵まれています。ぜひ見学にいらっしゃってください。そしてぜひ私たちと一緒に働きましょう！



右が梅田副センター長、左が金崎副センター長
女性医師の心強い、理解者！もちろん男性医師にも...

研修に関する連絡先

住所：大津市瀬田月輪町

担当部課：

医師臨床教育センター

(病院管理課内)

電話：077-548-2436

FAX：077-548-2832

E-mail：kensyu@belle.shiga-med.ac.jp

URL：http://www.shiga-med.ac.jp/~kensyu/

これからの地域包括ケアの時代を支える訪問看護ステーション

団塊の世代が75歳以上となる2025年を見据えたとき、慢性疾患を有する高齢者や医療依存の高い患者等、県民一人ひとりが希望する療養・看取りの姿が叶えられる地域包括ケアシステムの構築が喫緊の課題であるといわれています。

とりわけ、在宅をはじめとした住み慣れた地域で暮らし続け、安心して療養し、人生の最期を過ごすことができるようにするためには、医療・介護サービスに携わる多職種の活動の充実と連携の推進が求められています。

なかでも、看護職の活躍の場である訪問看護は在宅療養支援の要となるサービスです。

右の図は、滋賀県訪問看護ステーション連絡協議会の調査（毎年9月調査）結果をもとに、滋賀県の65歳以上人口千人あたりの数値で経年変化を見た資料ですが、平成22年度以降はステーションの職員数（医療職）が右肩上がりに増えていることがわかります。

現在滋賀県内には、92か所の訪問看護ステーションがあり、530人（常勤換算による数値）余りの看護職が活躍しています。もちろん病院で活躍する看護職は8400名余りと圧倒的に多いのですが、今後在宅で療養される方が多くなると予測される中で、訪問看護ステーションで活躍する看護職がもっともって増えてほしいと願っています。

在宅での看護を考えると、フローレンス・ナイチンゲールの「看護覚え書」に書かれた一文を思い出します。そこには「看護とは、与薬やパップを貼ることだけではなく、新鮮な空気、陽光、暖かさ、静かさ、清潔さを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること——すなわち、患者の生命力の消耗を最小にするようにすべてを整えることを意味するべきである。」と、看護のなすべきことを記しています。

在宅で過ごされている療養者の皆さんの療養生活が安全で安心なものとなるよう支援している訪問看護ステーションの看護者は、このナイチンゲールの言う看護の実践者であると思います。

お家の状況は空調の整った病院とは全く違います。ですから、療養されているお部屋の温度や湿度にも気を配りつつ、療養さんの病状観察をして必要な処置（医療依存度の高い方が増えていますので、人工呼吸器の管理やポート、点滴の管理等多様な処置を行ないます）を行う等、医療処置とともに療養環境を整える事も在宅看護の大切な要素となっています。

訪問看護に従事している方と話していると「退院直後は不安を持っておられるご本人やご家族も、訪問を繰り返す中で次第に安心されて『やっぱり家がいい』と穏やかに過ごされるようになる」「ご家族が吸引されているときは、就寝前に吸引しておいても、夜中にまた吸引が必要となることがあったが、看護師が就寝前の吸引を行うと、夜中の吸引が必要なく、朝までしっかりと眠ることができた」等というエピソード聞くことがあります。看護職ならではの療養支援を行うことができるのが、訪問看護ステーションでの看護の醍醐味であるかと思います。

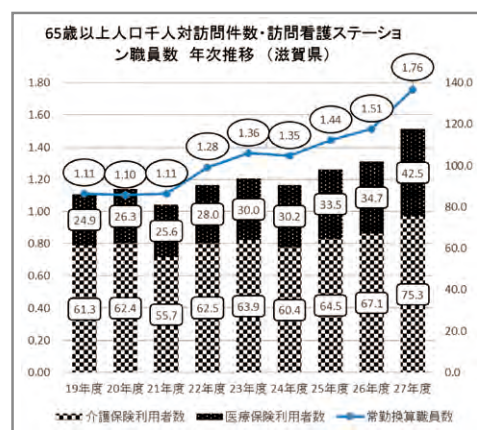
このような看護者としての魅力ある職場である訪問看護ステーションに、大学等を卒業したばかりの新卒の看護師の方にも就職していただき活躍してほしいと願って、滋賀県看護協会では、滋賀県からの助成を受けて「新卒看護師育成プログラム」を作成しました。

これからの在宅看護は若い方たちの活躍の場です

新卒の方の訪問看護ステーションへの就職については、多くの看護職の皆さんが「訪問看護は一定期間の病棟経験を経てから」と考えておられる状況にあり、新卒の方の就職がほとんどないという状況でした。（全くなかったわけではないのですが……）

そこで、「病棟経験がなくても訪問看護の現場で新卒ナースを育てよう」「生活支援の視点とケアができる看護師を育てよう」と、この育成プログラムを作成しました。

このプログラムの特徴は、「訪問看護の現場」で「地域の訪問看護師はその地域で育てる」という現場視点での人材育成のシステムであることです。



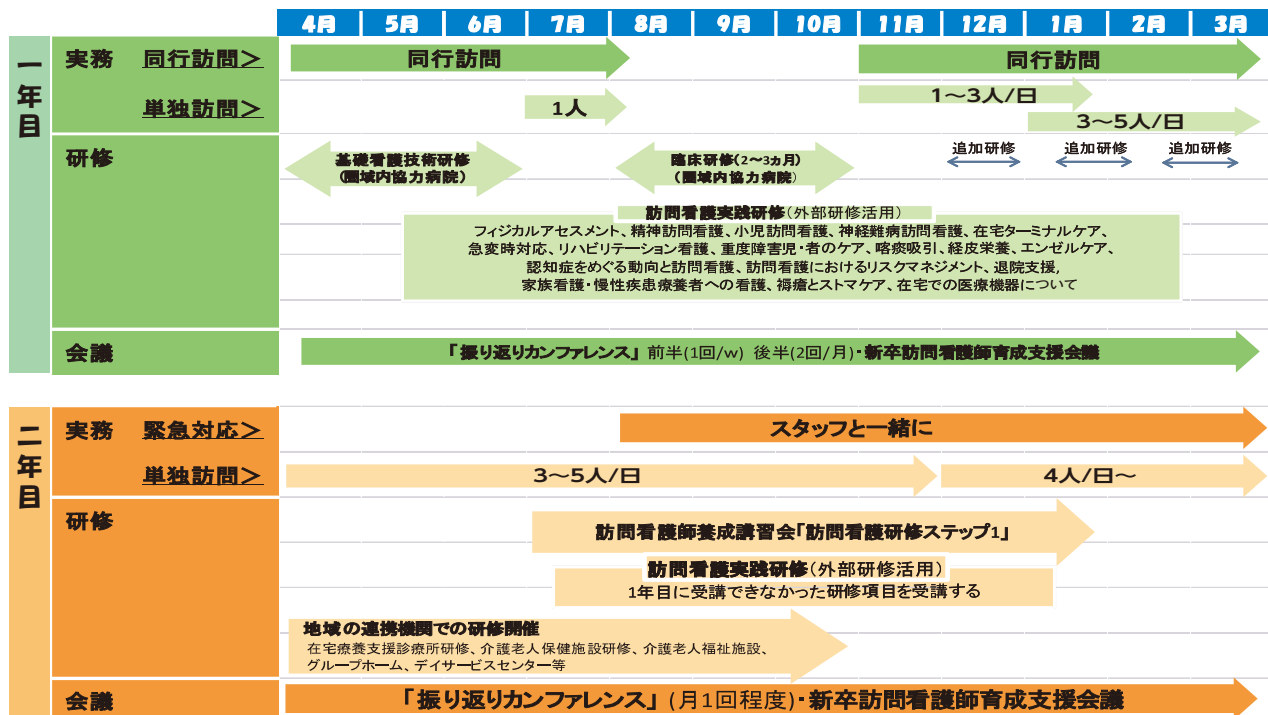
また、次のような指導体制を整えて、成長を支援することとしています。

- ① 指導は、訪問看護認定看護師または、ベテランの訪問看護師が行います。
- ② 入職初期より先輩訪問看護師と「同行訪問」をすることにより、「訪問看護師としての基本姿勢」「コミュニケーション力」などを実践を通して学ぶことができます。
- ③ 「同行訪問」では、新卒の看護師の学びを深めるため、先輩訪問看護師が繰り返し指導し、自信を持って一人で訪問できるまで丁寧に指導します。
- ④ 技術力の修得への不安に対しては、勤務地の圏域内協力病院において、病院勤務の新卒看護職員と同じ新人看護職員研修（集合研修）において学べるよう機会を設けています。

育成プログラムの詳細は、昨年「めぐる」2014年vol.6でも紹介していただき、今年度、2名の方が、滋賀県内の訪問看護ステーションに就職していただきました。

初めて看護職としての第一歩を踏み出すとき、誰もが経験する緊張や不安は、訪問看護ステーションに就職された方も、病院に就職された方も同じです。このプログラムに沿って研修と実践を重ねていただき、自信を持って療養者さんのところに訪問できる訪問看護師へと成長していただいています。

新卒訪問看護師育成プログラムのカリキュラム概要



参考文献:『訪問看護と介護』vol.18 No.8 2013

「新卒訪問看護師育成プログラム」開発と概要P629

訪問看護に興味関心を持っていた方へ

訪問看護支援センターは、滋賀県看護協会の中に平成27年5月1日に開設されました。この支援センターは、訪問看護ステーションの機能強化への支援など、訪問看護ステーションの応援団として活動しています。

県内には多くのステーションがありますが、新卒看護師の採用情報なども把握していますので、在宅療養を支える訪問看護への関心を持っていたり、あるいは、迷っておられる方も、訪問看護ステーションに関することを知りたいと思ったら、ぜひ支援センターにお電話下さい。お待ちしております。

訪問看護支援センター 連絡先

訪問看護支援センター(公益社団法人滋賀県看護協会 1階)

住 所:草津市大路二丁目11-51

TEL:077-564-6468

FAX:077-562-8998

E-mail:svn-shien@shiga-kango.jp



医学生・看護学生のみなさんへ 滋賀県内の医療系学生向け奨学金制度

滋賀県の人口10万人あたりの医師数（平成24年）は215.4人で、全国平均より少なく、全国35位となっています。

また滋賀県の人口10万人あたりの看護職員数（平成26年）は1,119.2人で、全国平均より少なく、全国38位となっています。

こうした県内の医師・看護職員不足に対応するため、滋賀県では、卒業後、滋賀県内で地域医療に貢献したいという意思をもった学生を対象とする奨学金の貸与制度を設けて、医療を志す皆さんの勉学のサポートを行っています。

◆医学生向けの奨学金制度

(1) 滋賀県医学生修学資金

対 象	大学の医学を履修する課程の学部在籍されている3年次の医学生の方
貸 与 額	年額180万円（大学を卒業するまでの4年間、毎年度貸与します。）
返還免除条件	大学卒業後（修学資金の貸与終了後）5年間、県内の病院で診療業務に従事し、かつ、最後の2年間は、県が指定する病院で診療業務に従事した場合には、返還が免除されます。 ※この5年の間に3年間の猶予期間があります。
返 還	返還免除条件に該当しなくなったときは、年利10%の利息とあわせて、6か月以内に、一括で返還していただきます。

- ・例年、年度初めに各大学等へ募集案内を送付するとともに、県ホームページで募集開始をお知らせします。
- ・募集期間は概ね1か月程度です。募集期間中に必要書類を県庁担当課へ提出していただきます。

(2) 滋賀県医師養成奨学金

対 象	滋賀医科大学医学部医学科に入学した者（学士編入学生を含む）で、将来滋賀県内で地域医療に貢献したいと考えている方の中から選考された者
貸 与 額	年額180万円（大学を卒業するまでの6年間（学士編入学生は4年半の間）、毎年度貸与します。）
返還免除条件	大学卒業後（修学資金の貸与終了後）9年間（学士編入学生は7年間）、県内の病院で診療業務に従事し、かつ、6年目以降は、県が指定する病院で診療業務に従事した場合には、返還が免除されます。 ※この9年または7年の間に4年間の猶予期間があります。
返 還	返還免除条件に該当しなくなったときは、年利10%の利息とあわせて、6か月以内に、一括で返還していただきます。

- ・奨学金の貸与を希望する方は、滋賀医科大学医学部医学科を受験する際、入学願書に必要事項を記入していただく必要があります。その上で、同大学に入学された方の中から選考が行われます。
- ・また、入学後、県庁担当課による説明会があります。
- ・選考を通過された方は、必要書類を滋賀医科大学学生課へ提出していただきます。

◆看護学生向けの奨学金制度

(1) 滋賀県看護職員修学資金

対 象	現在、次の①～③に在学する方 ①看護師等養成施設 ②大学院の看護を専攻とする修士課程 ③認定看護師教育課程に在学する方
貸 与 額	①月額15,000円～36,000円（貸与は1年単位で行います。）〈無利息〉 ②月額83,000円（貸与は1年単位で行います。）〈無利息〉 ③月額83,000円（上限6か月）〈無利息〉
返還免除条件	①卒業後、直ちに免許を取得し、免許取得後直ちに免除対象施設に就業し引き続き5年間業務に従事した場合には、返還が免除されます。 ②修士課程を修了した日から1年以内に県内に就業し、引き続き5年間業務に従事した場合には、返還が免除されます。 ③修了後1年以内に認定看護師となり、直ちに免除対象施設に就業し引き続き5年間業務に従事した場合には、返還が免除されます。
返 還	①卒業後、直ちに免許を取得し、免許取得後直ちに免除対象施設に就業し、引き続き貸与期間以上業務に従事した場合には一部返還、それ以外の場合には全額返還していただきます。 ②修士課程を修了した日から1年以内に県内に就業し、引き続き貸与期間以上業務に従事した場合には一部返還、それ以外の場合には全額返還していただきます。 ③修了後1年以内に認定看護師となり、直ちに免除対象施設に就業し引き続き貸与期間以上業務に従事した場合には一部返還、それ以外の場合には全額返還していただきます。

(2) 滋賀県立看護師等養成所授業料資金

対 象	現在、滋賀県立総合保健専門学校・滋賀県立看護専門学校に在学する方
貸 与 額	月額22,050円（貸与は1年単位で行います。）〈無利息〉
返還免除条件	卒業後、直ちに免許を取得し、免許取得後直ちに県内の施設に就業し引き続き貸与期間相当期間業務に従事した場合には、返還が免除されます。
返 還	返還免除条件に該当しなくなったときは、全額返還していただきます。

(3) 看護職員修学資金、県立看護師等養成所授業料資金の貸与の募集時期について

例年の貸与の募集時期等は下記の日程のとおりです。（日程は前後することがあります。）

- ・説明会（看護職員修学資金（養成施設）、県立看護師等養成所授業料資金のみ） 4月中旬（予定）
- ・申請書等の提出期限（養成施設を通して県にご提出いただきます。） 5月中旬（予定）

※養成施設等から県への提出期日となりますので、在学している養成施設等の提出期限を確認のうえ、養成施設の担当部署に提出してください。ただし、看護職員修学資金（認定看護師）については、別途、定めていますので、県庁担当課までご確認ください。

問い合わせ先 ▶ 滋賀県健康医療福祉部健康医療課 医療人材確保係

電話番号：077-528-3613 FAX番号：077-528-4859

メールアドレス：ef00@pref.shiga.lg.jp

ef00070@pref.shiga.lg.jp（医師キャリアサポートセンター）

ホームページ：

医学生向け http://www.pref.shiga.lg.jp/e/lakadia/ishikakuho/center_top.html#shugakushikin

看護学生向け <http://www.pref.shiga.lg.jp/e/imuyakumu/infomation/nsf/index.html>

～琵琶湖の北西、四季折々の高島市～

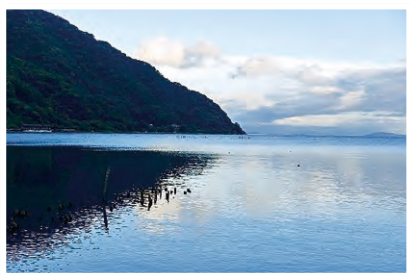
琵琶湖の北西側に位置し、面積は隣の長浜市に次いで県下第2位の広さで自然がたくさん残っている地域です。

2005年平成の大合併の時期に高島郡の5町1村（マキノ町、今津町、朽木村、新旭町、安曇川町、高島町）が合併して現在の高島市となりました。合併当時は「西近江市」という名前に決まりかけたのですが、住民投票で高島の名前が残りました。

合併当時に市役所の新庁舎を今津におくと決められましたが、財政的な問題から新庁舎凍結となり、新旭町にある旧庁舎を増改築する方針になりました。しかし、その方針をめぐるいまだに意見の対立が続いているのは住民としてお恥ずかしいところです。

普段は渋滞がないので北端のマキノから南端の旧高島町まで車で30分強で移動できますが、幹線道路が1本しかないため、春、夏の観光シーズンなど渋滞がたびたび発生し、その3倍以上の時間がかかることもあります。

京都～敦賀間を走るJR湖西線は高島市民にとってかかせない交通インフラですが、ダイヤが1時間に2本程度しかない上に「比良おろし」と呼ばれる強風のせいですぐに止まってしまうのが難点です。



「湖里庵」からながめる琵琶湖の風景



マキノにある「湖里庵」の鮎寿司

高島市には四季折々の風景がみられます。

マキノの海津大崎の桜。「日本さくら名所100選」に選ばれています。この海津にある「湖里庵」という料理屋さんでは高島の名物である鮎寿司を料理の素材として、また、調味料としてふんだんに使用した「鮎寿司懐石」というものがあり、おすすめです。

今津の富有柿は甘くておいしいです。朽木を通る鯖街道沿線には鯖寿司だけではなく、地元でとれたジビエ、川魚、蕎麦を楽しめる料理店がいくつかあります。

新旭町にはきれいな湧き水を生活用水に利用したシステム「かばた（川端）」が残っている家屋があり、たくさんの人が見学にこられています。「平成の名水百選」にも選定されました。

マキノ・今津・朽木エリアは気候が日本海側気候に近く、冬季は雪がかなりふり、スキー場にもぎわいます。私は以前はマキノ、現在は朽木に住んでいるのですが、冬は雪かきにおわれる毎日です。

県下で1、2位を争う高齢化率となっている高島市ですが、地域住民で知恵を出し合い、この自然をいかした生活環境を維持し、県内の他の地域のモデルとなっていくことが期待されています。



今津で栽培されている柿の畑

最後に「高島あるある」をすこしだけ。

「琵琶湖周航の歌」をご存じでしょうか？この歌は大正6年に今津町でうまれ、現在もお歌いつづけられています。

百貨店として有名な「高島屋」。この屋号は創業者の義父の出身が滋賀県高島郡出身であったため、それにちなんでつけられた名前といわれています。



今津町深清水から望む琵琶湖の風景



文：まつもと整形外科 院長
里親／高島市朽木在住
松本 道明

「長浜 いきいき健康フェスティバル2015」

開催報告

浅井東診療所 副所長 宮地 純一郎

2015年5月17日に、長浜バイオ大学にて「長浜 いきいき健康フェスティバル2015」が開催されましたが、その中で「まちのお医者さんと医療系学生の健康相談会」と題して、医学生・看護学生が医師の指導・同席の元で長浜市民の皆様の健康相談に乗るという企画を致しました。

企画は16日の「事前研修」を踏まえて、17日イベントに臨むという形を取りました。

「事前研修」は日頃診療所で多様な住民の診療を行っている家庭医指導医2名の企画のもと、合計3時間行いました。9名の医学生・看護学生が、相談に乗る際に重要な考え方について討論を行ったのち、お互いに相談の技術を練習するために、ロールプレイを実施しました。ロールプレイについては医学生・指導医がどんな点が良かったか、改善点は何かをお互いに声を掛け合いながらすすめました。最後に、翌日実際に住民の方の相談に乗るときにどんなことに気をつけるかを、各学生が自主的に目標を設定して事前研修を締めました。

17日は、医学生・看護学生たちが二人一組となり、一人が聞き役、一人が記録役という形で役割分担をして、そこに浅井東診療所の医師3名（松井・宮地・荒）と湖北総合病院の辻本医師が指導医としてサポートに入り、相談会を実施しました。1日で合計51組の住民から、健康診断の異常値の相談から家族の健康問題や介護の相談まで多彩な相談が持ち込まれました。イベントを終えた直後に、指導医と学生で振り返りを行いました。学生からは相談に乗ることのやりがいと難しさ、大学で勉強している医学や看護の内容が現場にどのように影響するのかを実感できたなどのコメントがありました。

我々も彼らのそのような姿を見て、地域でのイベントは、学生にとっては住民の生活と医療が交差する様子を垣間見る貴重な機会であり、我々のような地域で働く医師は、それをつないで未来の医療者を育てるためにわずかながら一役買うことができることを感じました。

また、この取組みはNPO滋賀医療人育成機構および湖北医師会のご後援の下で企画・運営をさせて頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。



参加された学生さんの声♪(抜粋)

とてもよい体験ができました。当日の実施では地域の住民の方々といろいろなお話しができ、また先生方や他大学の学生との親睦を深める機会もあり、学内だけでは得られない様々な交流を楽しむことができました。

特に地域の住民の方々の健康の悩みをお伺いさせていただくのは初めての経験で、話し始めから具体的な健康の悩みを話してこられる方々に対して、先生におつなぎするまでの間にできる限りの健康やそれにまつわる普段の生活の話を聞き出すことが十分できず、それが簡単でないことを实际的に学ばせていただきました。

また同時に、会話を通して相手との関係性を築き上げ、それを通して相手の生活や家族、地域のことなどの理解を深め、そういった背景も踏まえた上で相手の健康の悩みに触れていくといった家庭医療の流れの一端を体験させていただくことができ、良い学びを得ることができました。

参加報告

「NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク 全国の集いin北海道2015」

浅井東診療所 所長 松井 善典



▲札幌市時計台

去る10月12日に「NPO在宅ケアを支える診療所・市民全国ネットワーク 全国の集いin北海道2015」にてランチョンセミナーの座長を務めました。テーマは「在宅医療を支えるために、卒前教育からできる具体的な取り組みとは？」です。

浅井東診療所で行っている診療所実習や、今回の『めぐる』で報告されている長浜市健康フェスティバルの取り組みを紹介しつつ、滋賀医科大学の高石君と藤野さんというメンバーと一緒に『滋

賀県での在宅医療の始め方』パンフレットの紹介を行いました。

参加者は少なかったのですが、在宅医療の現場で学生教育を担っている多職種の方や各大学で在宅医療・家庭医療を教育されている教員の方々から活発な質問やコメントが出ました。今回の取り組みへの高い評価と強い関心を感じるものでした。

実はこの全国の集いの実行委員長もしており、高石君と藤野さんには当日十分関わる事が出来なかったのですが、大舞台に向けて3回ほど事前の打ち合わせを行いました。何を目的とするか、どのようなスライドを作成するのか、発表の時に注意することは何かなどを伝えることが出来ました。その中でも何かを学び取ってくれたようで何よりです。

今後もNPOに関わる多くの先生方と学生さんとの共同Projectが誕生し、その中で交流や学びあいがあったほしいと願っています。



▲高石君の発表



▲3人での記念撮影



▲会場での質疑の様子

開催報告

第5回「卒業後の自分を考える」 連続自主講座

7月15日(水) 午後6時から滋賀医科大学教職員ロビーにおいて「第5回卒業後の自分を考える連続自主講座」を開催しました。

講師には、**角野文彦先生**（滋賀県健康医療福祉部 次長、医師、滋賀医大医学科6期生）と、**糸山めぐみ氏**（訪問看護ステーション オリーブ 所長、看護師）をお招きし、滋賀県の保健医療政策に関わっておられる角野先生から、行政医師の仕事とやりがいについて、また、昨年 近江八幡市に訪問看護ステーション オリーブを開設された糸山氏から、在宅医療（高齢者だけでなく精神、障害児者も含めた）における訪問看護師としての苦労とやりがいについてお話をいただきました。

あいにく試験前のために学生3名の参加となりましたが、両講師を囲んで和気あいあいとした中で、本音話し合える会となりました。

ご多忙の中、ご講演いただきました角野先生、糸山先生有難うございました。



♪参加された学生さんからの声♪

- ・保健所に勤めておられた先生のお話ということで、どのようなこととお話し頂けるのかと期待を持って参加しました。お話し頂いた内容は、まるで戦国時代の軍師のような仕事ばかりで、お話を伺っていて大変面白いものでした。
- ・イメージしにくい行政における医師の役割がよくわかりました。地域の病院再編などにも関わっておられることを、初めて知りました。新卒で訪問看護師をするのは難しいと感じていましたが、受け入れる側も歓迎してくださっていることを知ることができて良かったです。「訪問看護師コース」など教育のバックアップも整いつつあるようなので、卒業後の進路の選択が広がればよいと思いました。
- ・県レベルでの医療行政のお話など、普段聞けないしあまり知らないことについてたくさん聞けて、とても貴重な体験になりました。実際の医療現場におられる糸山さんと、行政の立場から医療環境をつくる角野先生と、大学で研究、教育の立場から大局的に医療を分析する埴田先生の三人が、それぞれの立場からお互いを尊重しつつ、良い医療をつくるための輪を生み出している印象を受け、医療に直接的に携わる以外の方法でも、人の健康を守り高めることができるのだと感じさせられました。

開催報告

第6回「卒業後の自分を考える」連続自主講座 リアル『コウノドリ』の世界を知ろう ～毎日奇跡のすぐそばにいる私たちから君たちへ～

11月6日に開催しました第6回「卒業後の自分を考える連続自主講座」では、講師に野村哲哉医師、池川貴子医師、上里佳那子助産師、村上 節医師をお迎えし、各々の先生から次のような話を聞かせていただきました。

野村哲哉先生（南草津野村病院理事長・滋賀医大医学科2期生）

学生時代は心臓外科を目指していましたが、滋賀県では多くの心臓外科医を必要としないが産婦人科医は必要だったので、外科的なこともできると考え産婦人科医になりました。それでよかったと思っています。

県内に二つの産婦人科病院と助産院を経営し、今までに25,000名の赤ちゃんを取り上げました。今もって産婦人科医のみならず助産師も不足しているのが滋賀県の現状です。

池川貴子先生（滋賀医科大学医師臨床教育センター2年目研修医・滋賀医大医学科34期生）

学生時代から産婦人科医になりたいと思い、里親支援制度で野村先生に里親になっていただきました。大学卒業後は出身地の神戸に帰るつもりでしたが、野村先生や村上先生に滋賀や滋賀医大の先生方の魅力を改めて伺い、滋賀医科大学に留まる決意をしました。

産婦人科の魅力は、「生まれる」瞬間、助けられるのは2人（母親と子供）であること、多くの治療法・手技があり、患者さんへの対応がそれぞれに違うことです。また、ロールモデルとなる女性医師が多くいることも魅力のひとつです。大学病院の魅力は、先生方が熱心で

優しい方が多く、多種多様な症例があり、周産期・婦人科腫瘍・不妊など多岐に渡って学べる環境に恵まれているということです。また、夜間も次の日を気にすることなくしっかり働けるよう「副直明け休み制度」も調えられており、働く環境にも恵まれています。

上里佳那子氏（滋賀医科大学医学部附属病院看護部MFICU 4年目助産師）

「いいお産」とは、どのようなお産だと思いますか？ 学生へ問いかけながら、出産前に胎児に奇形があることを告げられた父母の、出産前から赤ちゃんが亡くなるまでのわが子を思う気持ちの変遷と、その家族に寄り添った助産師の思いについて、参加者の心に迫る発表をいただきました。

赤ちゃん誕生を、状況によっては「おめでとうございます」と口に出せないときがあります。「おめでとうございます」と言えるかどうかは、家族によります。「いいお産」とは、赤ちゃんを家族が迎え入れられるお産だと思います。

滋賀医科大学附属病院では、ハイリスクのお産について勉強しています。

村上 節先生（滋賀医科大学産科学婦人科学講座教授）

精子と卵子の天文学的数字の割合で私たち一人ひとりが生まれてくることは奇跡です。

がん治療を行うと女性は閉経が早まり、子どもを持つ機会が奪われますが、現在では卵子を凍





結でき、閉経後も子どもを持つことができるようになりました。この生殖医療情報は、医師のみならず、助産師、看護師、事務職員なども知っておかなければならないし、患者に提供する必要があります。滋賀医科大学では、滋賀がん・生殖医療ネットワークを構築し発信しています。

お話の後、学生からの質問に各先生が丁寧にお答えいただいた中で、次の話が印象に残りました。

- お産の基本は、通常分娩です。お産にリスクの「有る」も「無い」もなく全て同じです。
- 臆病で心配があれば医師にすぐに報告してくれるような助産師になってほしいです。
- 産婦人科医はハードワークとされていますが、現在60歳の野村先生は、患者さんが来てくれるうちは花であると思い、仕事のオン、オフを切り替え、どこでも眠れるように心がけておられます。

また、村上先生は、大学病院は地域の病院と違って、一人の患者さんを固定医師で受けもたず医師チームで受け持つことや、副直明け休み制度等を取り入れる等して、負担の軽減に努めておられます。

- どの先生も患者さんとの心温まるふれあいに一番感動したと、語っていただきました。

医療現場で勤務されている看護師の方々からの声も聞け、参加された学生・一般市民の方は大変有意義な時を持つことができました。



参加された方からの声

- たくさんの先輩の仕事に対する思いをきけて、とても頑張りたい気持ちになりました。
- 妊娠・分娩・産後とつながっているが、ひとつひとつの経過が奇跡なのだと改めて感じました。患者さんが中心にあり、患者さんにとっての良いお産を手助けできる助産師になりたいと私も思います。
- 産婦人科の先生方のやりがいを聞けて刺激になりました。これからの医学の勉強が非常に楽しみになりました。
- 違った立場にいる4人の先生方からお話を聞くことができ、とても参考にまりました。ドラマでコウノドリを見ていますが、現場で直接働いていらっしゃる人の言葉はドラマよりもずっと感動的で「奇跡のすぐそばにいる」ということがひしひしと伝わってきました。また、いつもと違ってたくさんのスタッフの方がいらしゃって、質疑応答において、様々な意見を聞くことができ良かったです。
- 助産師を目指しています。本当に貴重なお話をありがとうございました。これからも継続してやって頂きたいです。滋賀県のお産を充実させていきたいです。

入会・ご寄附のご案内

機構が1年間の事業を実施していくための必要経費は年間580万円程度が必要ですが、この経費を、皆様からの会費とご寄附並びに『地域医療を担う医師等育成事業補助金』で賄っております。

11月末の時点では、会費20万円、寄附金140万円、補助金200万円、合計360万円のご寄附等をいただいておりますが、活動を行っていくには十分とはいえません。

出費がかさむ折とは存じますが「地域医療を担う医学生看護学生の育成支援事業」にご支援していただける方々のご協力をお願いいたします。

会員は

会員の種類		会 費	入会金（初年度のみ）
正 会 員	個 人	年会費 2,000円 + 寄附金 3,000円以上	5,000円
	団 体	年会費 5,000円 + 寄附金 5,000円以上	10,000円
賛助会員		毎年 1,000円以上 できたら 3,000円以上	

ご寄附は

ご寄附いただく金額は決まっておりませんが、できたら3,000円以上をお願いします。

入会・寄附に関するお問い合わせは、機構事務局（077-548-2802）にご連絡ください。

本機構が「認定特定非営利活動法人」になったことに伴いまして、ご寄附・賛助会費をご入金された方は「税制上の優遇措置」【寄附金控除、または寄附金特別枠控除（税額控除）】を受けることができます。

ご入金された方には「寄附金の受領書」を郵送しますので大切に保管いただき、確定申告時には、「申告書」に「寄附金の受領書」を添え最寄りの税務署にご提出ください。

なお、詳細につきましては、最寄りの税務署にお問い合わせください。

編集後記

台風15号が接近してくる8月24～25日に実施しました夏の宿泊研修では、湖西方面（高島市）を訪問させていただきました。期間中の風雨を心配しましたが、初日は小晴天に恵まれ、自然豊かな琵琶湖の風景を堪能できました。二日目はあいにくの小雨模様でしたが、四方を山で囲まれた旧朽木村を訪れました。湖西地域で生活されている方々のお話から地域への愛着、ここで生活されていることへの誇り、相互扶助の温かさが伝わり穏やかな気持ちになれました。ご協力いただきました多くの皆さま本当に有難うございました。瀬田駅で解散し帰途についた途端、台風の為にJR琵琶湖線は不通という現実社会に引き戻されてしまいました。

「卒業後の自分を考える連続自主講座」には、滋賀県内の看護専門学校生が初めて参加いただきました。徐々に活動が周知されてきたことを大変うれしく思います。機構では学生の方々のご参加をお待ちしています。



NPO法人滋賀医療人育成協力機構 広報誌「めでる」vol.9

発 行：平成27年12月1日
 編 集：NPO法人 滋賀医療人育成協力機構
 所 在 地：滋賀県大津市瀬田月輪町 滋賀医科大学内
 T E L：077-548-2802 FAX：077-548-2803
 Email：satooya@belle.shiga-med.ac.jp
 U R L：http://www.shiga-iryo-ikusei.jp/